

論文の内容の要旨

論文提出者氏名	橋 本 瞬
論文審査担当者	主 査 関島 良樹 教授 副 査 野見山 哲生 教授 ・ 田淵 克彦 教授
論文題目 Prevalence and Risk Factors of Carpal Tunnel Syndrome in Japanese Aged 50 to 89 Years (日本における 50～89 歳の手根管症候群の罹患率と危険因子)	
(論文の内容の要旨) 【背景】手根管症候群 (carpal tunnel syndrome: CTS) は最も頻度の高い絞扼神経障害であるが、一般住民に対して臨床症状と神経伝導速度検査を用いて診断を行い、罹患率を調査した報告は少ない。また東アジアにおける CTS の疫学調査は韓国からの 1 文献のみである。本研究の目的は、住民台帳より無作為に抽出したコホートに対して臨床症状と神経伝導速度検査を用いて診断を行い、CTS の疫学を調査することである。 【方法】本研究は当教室が行っている高齢者の検診を兼ねた運動機能に関する疫学調査“おぶせスタディ”の研究の一つである。“おぶせスタディ”は、長野県小布施町の住民基本台帳から無作為に抽出した 50 歳から 89 歳の住民を対象とした。10 歳毎の各年代の男女がそれぞれ約 50 人ずつ合計約 400 人になるまで参加を依頼した。既往歴、飲酒、喫煙などの生活習慣、精神状態や職業などのアンケート調査と、医師による骨密度、筋力、神経機能の測定、X 線撮影などからなる。本研究では手関節周囲の骨折の既往歴がある者と、質問票にデータ欠損がある者は除外した。CTS に対して手根管開放術を行ったと答えた者は CTS の既往ありとした。正中神経領域の感覚異常があり、正中神経の神経伝導速度検査で遅延を認めた者を CTS 有病者とした。CTS の既往ありと CTS 有病者を合わせて、CTS 罹患率とした。CTS に関連する因子を単変量および多変量ロジスティック回帰分析を使用して検討した。P<0.05 を有意水準とした。 【結果】対象者数は 379 人で、女性 14 人、男性 3 人の計 17 人が CTS 罹患率であった。CTS 罹患率は女性 7.4%、男性 1.6%、全体で 4.5%であった。50 歳から 89 歳の日本人の人口構成に合わせて調整した年齢調整罹患率は女性 7.2%、男性 1.8%、全体で 4.7%であった。各年代別の罹患率の違いに明確な傾向は認められなかった。統計学的に CTS 罹患と関連していた因子は女性、高い BMI、関節リウマチ、弾発指であった。女性では短い第 3 中手骨長も CTS 罹患の因子であった。 【考察】本研究の利点は、被験者の無作為抽出を行ったため選択バイアスが小さい点である。このように地域住民から無作為抽出を行った一般者を対象として CTS の疫学調査を行った研究は過去にわずかである。一方、過去の研究の多くは病院受診患者を対象者として調査した研究である。本研究では参加を拒否した者がおり、検診なので疾病に興味のある者が参加する可能性があるため、各疾患の罹患率が高く見積もられる可能性がある。認知症の者を除外していないので想起バイアスの危険性がある。2 つの検査を共に満たす者を手根管症候群と診断している点、手根管症候群既往の調査では手術既往のある者のみを手根管症候群と判定している点は軽症の手根管症候群を見逃している可能性がある。先行研究において CTS の関連因子として女性、肥満、糖尿病、長期血液透析、甲状腺機能異常、関節リウマチ、手の過使用、振動工具作業、手が小さいことなどが挙げられている。本研究では女性、高い BMI、関節リウマチ、弾発指、女性における短い第 3 中手骨長が CTS 関連因子であったが、糖尿病、甲状腺機能異常、重労働、振動工具作業などの因子は CTS と関連を認めなかった。 【結論】本研究は 50 歳から 89 歳の日本人の年齢調整罹患率は 4.7%であること、CTS 関連因子には女性、高い BMI、関節リウマチ、弾発指、女性における短い第 3 中手骨長があることを明らかにした。	

